

No.12	提 案 名：まちづくり駄菓子屋「おかしのいえ」	
	提案団体名：宇都宮共和大学 陣内ゼミ	
	所 属：宇都宮共和大学 シティライフ学部	
	代 表 者：高橋 凌	指導教員：陣内 雄次
メンバー	上野聖矢 松本彩花 妻木えりの	

○ 提案の要旨

本提案は、駄菓子屋を通して多世代の交流を促し、宇都宮の各地においてささやかなにぎわいを日常的に喚起することを目的とする。

昭和初期から続いている駄菓子屋であるが、今日、駄菓子屋の数は減少傾向にある。また、近年は少子高齢化などに伴うコミュニティ力の衰退、加えて、新型コロナウイルス感染症の影響で、地域における多世代交流も抑制気味である。そこで本提案では、多世代交流とささやかな日常的なにぎわいを促すために、まちづくり駄菓子屋「おかしのいえ」を提案する。提案に当たっては、宇都宮市内の駄菓子屋の現地調査、駄菓子屋「おかしのいえ」の実施、アンケート調査、文献調査などに取り組んだ。

1. 提案の背景・目的

宇都宮市では少子高齢化^{*1}や核家族化が進んでおり^{*2}、また、子育て環境も大きく変化し、子どもの居場所や遊びの場が減少している。このような中、親以外の人との関わりが乏しく^{*3}、子ども同士または他世代と関わることで互いに影響し合う活動の機会が失われていると考える。つまり、子どもたちにとって様々な『経験の場』が奪われているともいえるだろう。

これらの現状を踏まえ、子ども同士または他世代との交流の場を創出することが必要であると考える。また、そのような交流を通じて、ささやかではあるが、日常的なにぎわいが創出できるものとして、子どもの居場所となり得るような駄菓子屋を考えた。

私たちの提案する駄菓子屋「おかしのいえ」は移動販売の駄菓子屋である。様々な場所で開設し、子ども同士のふれあいと世代間交流、加えて子どもたちの社会性を育める場となるとともに、コミュニティ内でのにぎわいづくりのきっかけとすることが目的である。

2. 提案の目標・課題「私たちから始めよう にぎわいアクション」との関連

駄菓子屋「おかしのいえ」は子どもをメインの顧客としているものの、駄菓子屋に馴染みのある親世代や高齢者など多様な人々に訪れてもらい、多世代の交流の場となることを目的として活動している。また、移動販売の駄菓子屋であるため、固定店としての受け身の姿勢ではなく、自分たちから赴いてアクションを起こすことが強みである。この2点から、様々な場所で駄菓子屋を展開し、「おかしのいえ」を目標に子どもが盛んにまちへ出て、交流し、互いに影響し合える場所となり、また、日常的なささやかなにぎわいづくりに繋がるものであると考える。これが「私たちから始めよう にぎわいアクション」のテーマと合致していると言える。

3. 現状分析

3-1 パーマ屋文具店への現地調査

宇都宮市の老舗の駄菓子屋のひとつであるパーマ屋文具店（中央小学校となり）へうかがい、お店の様子を拝見するとともに、店主の方にお話をうかがった（2022年6月28日）。70年続いているという正に「老舗」である。パーマ屋文具店の現地調査により、

- ・ 商品を陳列している位置が子ども目線である。
- ・ 開けっ放しにして、入りやすい雰囲気
- ・ 買ったものをその場で飲食可能
- ・ 直射日光を当てずに商品を管理する難しさ
- ・ 賞味期限の確認の重要性



写真1 パーマ屋文具店（2022.6.28撮影）

など様々なことが分かった。加えて、店主の方にインタビューを行った結果、小学生の時に通っていた児童が大人になっても来店してくれていることや、中央小学校の児童だけでなく他の小学校からも来ている児童がいることなどが明らかになった。また、三世代にわたって来てくれる家族もいるという。駄菓子屋の魅力というのは、このように世代を繋ぐものであり、また、子ども達にとって「行きたい」と思わせる吸引力があると言える。多世代に支持される駄菓子屋だからこそ、そこに、コミュニティにおけるささやかな日常のにぎわいをつくれる可能性があるということを感じた。

3-2 「おかしのいえ」の活動記録

パーマ屋文具店での現地調査をふまえた上で、実際に駄菓子屋「おかしのいえ」を以下のようなスケジュールで実施した（表1）。

表1 駄菓子屋「おかしのいえ」の活動一覧

時期 (2022年)	場所	イベント名	内容
8月20日	宇都宮共和大学シティキャンパス	駄菓子屋「おかしのいえ」プレ活動	オープンキャンパスとクールシェアコンサート時に大通り側一階コリドールの一区画でプレ的に実施
9月18日	栃木市（とちぎ山車会館前広場）	第5回栃木市高校生合同文化祭	高校生が主催する合同文化祭に出店
9月23日	宇都宮市立峰小学校	みね秋まつり	学生+子どもたちが売る側となり駄菓子屋を実施 (1)
10月12日	宇都宮市立築瀬小学校	築瀬霜月祭	学生+子どもたちと一緒に駄菓子屋の準備を行う (2)

3-3 駄菓子屋の意識調査の実施と考察

駄菓子屋「おかしのいえ」を実施した際、子どもたちの社会性や多世代交流の場の創出のために、駄菓子屋を通してのにぎわいづくりには何が重要であるのかについて調査を行った。そして、この駄菓子屋の意識調査の結果と考察をもとに、今後の駄菓子屋「おかしのいえ」の活動に反映し、私たちからできる日常的なにぎわいづくりを展開していくこととした。

(1) アンケート調査の概要

- ・ アンケートをとったイベント名

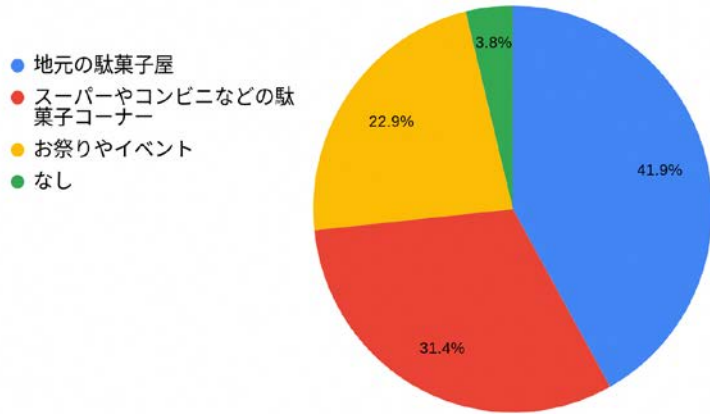
宇都宮共和大学オープンキャンパスとクールシェアコンサート、第5回栃木市高校生合同文化祭、みね秋まつり

- ・回収数 216件
- ・回答者の属性 小学生以下119人、中高生49人、19歳～50歳41人、51歳以上7人

(2) アンケート結果

1) 利用している駄菓子屋の実態

問2 今までに駄菓子屋を利用したことはありますか。



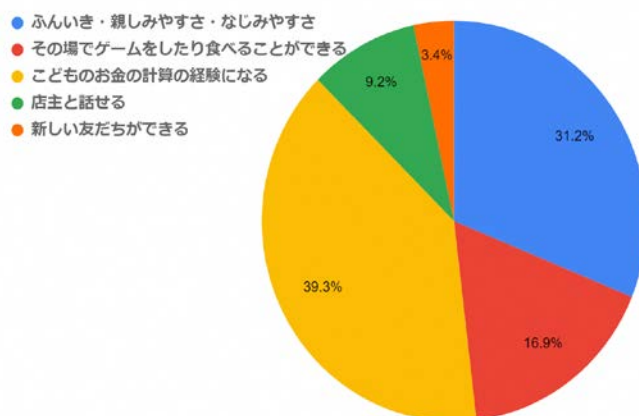
N=216

図1 駄菓子屋利用の現状

最も多かったのは「地元の駄菓子屋」であった（約42%）。現代において、駄菓子屋自体は減少しつつある。例えば、2017年の新聞記事によれば、駄菓子屋など菓子小売業（製造小売りは除く）の2014年の事業所数は約1万4千カ所であり、20年間で7割以上減少した、とある（日経新聞2017年8月21日）。しかし、本アンケート結果を見れば、地元の駄菓子屋を利用した経験のある人は5割近くおり、駄菓子屋への潜在的なニーズはあると言えるであろう。

2) 「地元の駄菓子屋の良さ」について

問3 地元の駄菓子屋ならではの良さはなんだと思いますか



N=216

図2 (駄菓子屋専門店) 地元の駄菓子屋ならではの良さ

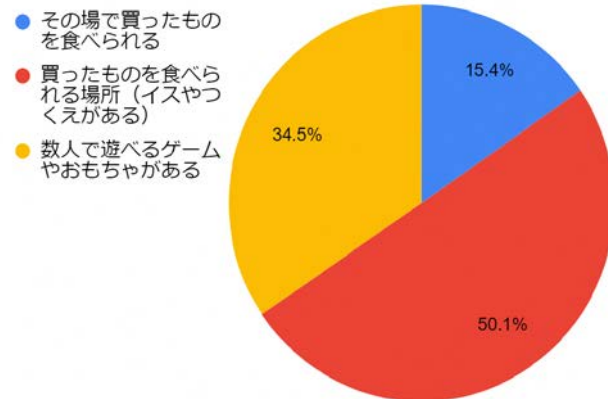
地元の駄菓子屋の良さとして最も支持されたのが、「子どもにとってお金の計算の経験になる」(約40%)である。お小遣いの許容範囲を考慮し、自分の判断で選別し、購入するという行為を通じて、経済活動が密接になり、社会性を育んだりお金のやり繰りの難しさや大切さを学ぶことに繋がると考える。これは、子どもを顧客とした駄菓子屋の大きな役割であり、地元の駄菓子屋(駄菓子専門店)がもつ強みであると言えよう。

また、地元の駄菓子屋の良さとして、「雰囲気や親しみやすさ」を約3割の回答者が挙げている。誰にとっても利用しやすく、安心感の得られる雰囲気が地元の駄菓子屋特有のものであると考えられる。また、これには駄菓子屋の店主の存在も重要であるとする。子どもたちの行動を抑制・管理することなく、しかし、全くふれあわないというわけではなく、店主がとる絶妙な距離感が、子どもたちの自由や責任感をうまく醸成しているのではないだろうか。

このような学校や習い事、家庭と隔絶された拘束のない中で創られた独自の空間が、昔ながらの駄菓子屋の良さとしての雰囲気や馴染みやすさを構築してきたともいえるであろう。

3) 駄菓子屋にあるとよいもの

問5 駄菓子屋にどんなものがあつたらいいと思いますか。



N=216

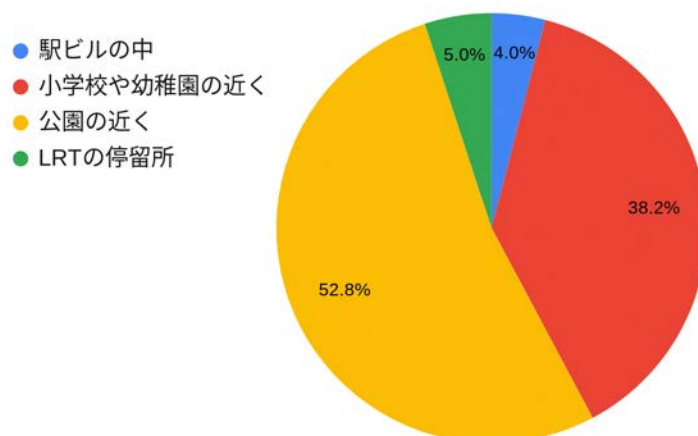
図3 駄菓子屋にあると良いもの

これについては、「買ったものをその場で食べられる場所（椅子や机など）」（約46%）が圧倒的に多く、続いて、「数人で遊べるゲームやおもちゃがある」（約29%）であった。

この結果から、子どもたちは買い物のみを理由に、駄菓子屋を訪れているだけではないと認識できる。そして買い物以外の目的とは、子どもがいわゆる「居場所」を求めていると考えられる。その場で購入したものを食べることや複数人で遊べるゲームやおもちゃがあることは、子ども同士の交流の場であり、子どもの直接的な居場所となり得る。

4) どのようなところに駄菓子屋があつたら賑わうか

問6 どんなところに駄菓子屋があつたらにぎわうと思いますか。



N=216

図4 にぎわいを創出する駄菓子屋の立地場所

「公園の近く」（約53%）、「小学校や公園の近く」（約38%）が多くの支持を得た。子どもを相手とする駄菓子屋は子どもたちの生活空間により近い場所にあることが理想的であり、子どもにとって同世代と密接に関わる機会を与えてくれる存在であるとする。

4. 施策事業の提案

これまでの調査結果などから、駄菓子屋は子どもたちの生活空間により近い場所にあるべきでないか、つまり、子ども達の日常生活圏の中にあるべき居場所的な存在なのではないかと考えた。また、子どもたちにとって学校や家庭と異なり、地域に開放された場所であり、地域の人との交流や多様な世代と密接に関わる機会を与えてくれる存在であり、地域の中で、ささやかであるが日常的な振る舞いを創出する可能性を持つのが駄菓子屋であるということがわかった。そのことを踏まえた上で、以下の施策事業を提案する。

4-1 まちづくり駄菓子屋「おかしのいえ」の移動販売

まちづくり駄菓子屋「おかしのいえ」を移動販売式にし、定期的に駄菓子屋を市内各地でオープンする。運営は学生を中心に考えているが、学生以外にも地域の自治体、NPOに加え子ども達が参画する仕組みにする。つまり地域みんなの「おかしのいえ」である。小学校区に一つ、その校区独自の「おかしのいえ」があることが期待される。

まずは、地域のイベントや小学校の行事に出店することで、「おかしのいえ」の活動を広げ、認知度を高めるとともに協力者を募る。駄菓子を販売するだけでなく、子ども同士や子どもと地域の大人、多世代の人と関われる玩具やゲームを置き、多世代のふれあいの場をつくる。「おかしのいえ」の販売や運営に関わることで、子どもの社会性を育める場所を提供することができる。

次に公園など公共空間での使用許可を取った上で 地域の子どもの運営や販売を体験出来る移動販売に取り組む。この移動販売のメリットは三つある。一つは子どもたちが駄菓子を購入するという行為を通じて、子どもたちがお金の使い方について考える力を身につけるといこと。二つ目は駄菓子を販売する（つまり、お客さんでなく売る側になる）ことで、普段の店では経験できないお金の価値を学ぶということ。三つ目は、駄菓子屋は店主と客との距離が近いことから、多様な交流、経験を持てる可能性があること。四つ目は、この活動を通じて、身近なコミュニティ（地域）においてささやかなにぎわいづくりの主体に子どもたちがなれる、ということである。これにより、地域での日常的なにぎわいが起こり、地域活性にも資することとなる。



写真2 移動式駄菓子屋「おかしのいえ」のイメージ A)

4-2 公園で駄菓子屋「おかしのいえ」の出店

提案目的の本質部分である子ども同士のふれあいと世代間交流、加えて子どもたちの社会性を育める場所を、生活空間において身近である公園と定め、まちなにぎわいアクションを起こしたいと考える。

(1) 出店場所

上記のとおり、アンケート結果から駄菓子屋の出店場所は公園、または小学校の近くが適切であると考えられる。また、アンケート結果から買ったものをその場で食べられる場所（椅子や机など

の設置)、また数人で遊べるゲームやおもちゃがあること(それらを利用して遊べるスペース)が必要であると考え。したがって、この2点を有効に兼ね備えた公園に駄菓子屋を設置する。

(2) 公園での営業について

公園は市民みなとの共有の財産であることから、個人的な営業活動は原則として認められていない。したがって、管理団体である自治体や地元自治会などの協力・後押しが必要不可欠である。したがって、活動拠点とする公園が位置する自治会並びに管理団体である市役所と連携し、地域を巻き込んで駄菓子屋を展開する必要がある。

(3) 自治体、自治会等との連携

宇都宮市「みんなでまちづくり課」は、住民主体のまちづくりを支援してくれる部署であることから、拠点とする公園が立地する自治会との連携や市内調整に関して協力を仰ぐこととする。

以下が、想定される公園での「おかしのいえ」出店のステップである。

ステップ①「おかしのいえ」出店に関し、宇都宮市「みんなでまちづくり課」を中心に、関係部署との調整。

ステップ②宇都宮市を通じて、拠点となる公園の自治会、地区市民センターまたは市民活動センターと協議。

ステップ③出店の日時を確定したうえで、以下の4者で「おかしのいえ」出店について詳細を協議。

メンバー

- ・拠点となる公園の属する地域の自治会長
- ・拠点となる公園の属する地域の地区市民センターまたは市民活動センターの職員
- ・宇都宮市職員
- ・「おかしのいえ」プロジェクトメンバー

協議内容

- ・営業の許可、出店についての詳細確認、販売時間・範囲、ゲーム、玩具等の取り扱い、椅子・机の設置の許可など

ステップ④「おかしのいえ」プロジェクトメンバーが中心となり、自治会、宇都宮市などと協力して公園での駄菓子屋活動を展開し、地域の人々の繋がりづくりとにぎわいづくりを推進。

(4) 自治体、自治会等と協力(協働)することで得られるメリットと地域住民へのメリット

「おかしのいえ」プロジェクトメンバー

- ・回覧板で宣伝してもらうことによる集客効果
- ・様々な地域の人とネットワークづくり
- ・地元自治会や行政からの支援による活動範囲の拡大 など

自治会及び自治体

- ・学生と繋がることによる自治会及び自治体へ新たな活動範囲の拡大と活性化を提供できる
- ・地域のにぎわいづくり(自治会活動) など

地域住民

- ・子どもが安心して遊べる環境づくり
- ・子どものための買い物体験の場づくり
- ・地域におけるにぎわいづくり など

以上のような公園での駄菓子屋「おかしのいえ」の取り組みにより、地域における世代間交流と新たな体験や学びの場が創出されると考える。加えて、地域社会における新たなにぎわいを提供することができる。



写真3 公園での駄菓子屋「おかしのいえ」のイメージ B)

4-3 駄菓子屋開設のためのリーフレットの作成

「(仮称) 駄菓子屋ブック あなたから始めるだがし屋さん」

駄菓子屋に興味のある市民が、駄菓子屋をより気軽に始められるよう、その指南書としてのリーフレットを作成する。この「駄菓子屋ブック あなたから始めるだがし屋さん」を配布することで（SNSなどの配信も）、市内のさまざまな場所で駄菓子屋が展開されることを目指す。子どもたちの外出の機会が増え、地域でのコミュニケーションや多世代交流が盛んとなり、日常的にぎわいづくりにつながる。

私たち学生や市民の役割として、駄菓子屋ブックを身近な人たちに周知することが期待される。駄菓子屋「おかしのいえ」を利用し、感じたことを直接伝えることで、関心を持ってくれる市民が増える。メリットとしては、駄菓子屋ブックを通して、会話が生まれることや自分たちも始めようとするきっかけの一つになることである。

「駄菓子屋ブック あなたから始めるだがし屋さん」の概要

1 ページ：表紙

2、3 ページ：駄菓子屋の歴史、意義など（まちづくり、にぎわいづくり、多世代交流など）

4、5 ページ：オープンまでの行程（企画提案→場所→いつ→仕入れ→実施→振り返り→次へ）

6、7 ページ：よりよい駄菓子屋さんにしていくための留意点（子どもが主役であること、子ども目線の高さの店づくり、使用後の清掃、賞味期限の確認、現金管理、地域のお祭り情報、公園などを使う場合の許可申請、コロナ感染対策など）

8 ページ：宇都宮市内の間屋集、連絡先など

4-4 長期的提案 「駄菓子屋併設+〇〇」や公設駄菓子屋の展開など

長期的な視点から、「駄菓子屋併設+〇〇」を提案する。+〇〇とは、例えば、「駄菓子屋併設デザイン事務所」「駄菓子屋併設コワーキングスペース」「駄菓子屋併設デイサービス」などである。この提案は昨今の駄菓子屋の減少に対抗するものであり、本業以外に駄菓子屋を併設することで地域の交流の場所として、新たなにぎわいをつくることを目指すものである。駄菓子屋スペースを設けるための改修費用などについて、公的な支援が期待される。その他にも公設民営の駄菓子屋を提案したい^{*4}。これは市が設置し、民間（例えばNPOや学生グループなど）が運営する駄菓子屋であり、コミュニティの居場所的な意味合いが濃いものである。運営には子どもや若者も関わられるようにし、「働く」ことの意義や難しさ、そして、やりがいを実体験から学べる場とするとともに、多世代の交流とにぎわいづくりを進めたい。

【補注】

*1、*2 「宇都宮市まち・ひと・しごと創生推進計画」によれば、本市の人口は2019年に減少に転じている。また、生産年齢人口（15歳～65歳）は2005年をピークに、その後減少し、老年人口（65歳以上）は増加を続けている。

(https://www.chisou.go.jp/tiiki/tiikisaisei/dai55nintei_furusato/plan/bl36.pdf 最終関

覧日 2022 年 11 月 24 日)

*1、*2 https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/_res/common/opendata/1021163/setai.pdf

*3 例えば、広井多津子（実践女子大学）は「核家族化は「家庭の教育機能」を低下させたか」（『クォーターリー生活福祉研究：明治安田生命生活福祉研究所調査報』通巻 57 号）で、子どもの親以外の大人との交わりの減少傾向について指摘している。

*4 東京都江戸川区では、引きこもっている区民の居場所や就労体験の場として、区立の「駄菓子屋」を開設することを公表している。（読売新聞オンライン「引きこもりが働く場所に、区立の「駄菓子屋」開設へ... 子どもに接客で社会復帰第一歩」2022 年 9 月 9 日 <https://www.yomiuri.co.jp/national/20220909-OYT1T50109/> 最終閲覧日 2022 年 11 月 14 日)

【参考文献】

- 1) 岩本 廣美, 細谷 恵子「駄菓子屋の教育的機能 —子どもと店員の関わりを通して—」『教育実践総合センター研究紀要』奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター、pp. 65-74、2005 年
- 2) 加藤理「子どもの文化・社会に果たしていた 駄菓子屋の役割について」紀要『子ども社会研究』第 2 号、pp. 103-116、1996 年
- 3) 松田道雄『駄菓子屋楽校 —小さな店の大きな話・子どもが開く未来学—』新評論、2002 年

【写真出典】

A) ツバメアーキテクツ

<https://tbma.jp/works/%e3%83%9e%e3%82%a4%e3%83%91%e3%83%96%e3%83%aa%e3%83%83%e3%82%af%e5%b1%8b%e5%8f%b0/> 『ソトコト』2016 年 6 月号（最終閲覧日 2022 年 11 月 17 日）

B) 古小鳥公園バザー開催！おしらせ | 福島市中央区薬院いふくまち保育園

<https://ifukumachi.jp/archives/870>2022 年 10 月 21 日（最終閲覧日 2022 年 11 月 19 日）